

## 第十三話 定年後、“古本病”にかかる

### ●ふつうの本好きなサラリーマンだった

一箱古本市や各種トークイベントなどで、いつも顔を会わせながら、ちゃんと話を聞いたのが今回が初めて。エキサイトブログで、「モンガの西荻日記」を書いておられるモンガさん（仮名）の登場だ。

前から聞いたかったことは、ブログを見ると、最近こそ少しペースが落ちたが、一時期、毎日のようにブックオフや古本屋へ寄っては、五冊、十冊と買い込んでいる様子うかがえたが、それをどう収納されているのか、ということだった。

立ち話で、「千葉にコンテナのトランクルームを借りているんですよ」と話されたことがあり、今回、そのへんを根掘り葉掘りうかがった。

モンガさんは昭和二五年生まれで熊本県の出身。現在六十一歳。高校卒業とともに、建築関係の会社に入社した。会社は全部で三つ変わったが、みな職種は同じだという。六十歳で定年退職するまでは、ごく普通の、まじめなサラリーマンだった。

「それまでも本は好きでしたが、読んでいたのは、ほとんどがストーリーのある……つまり小説ですね。松本清張、吉村昭、城山三郎なんかが好きでした。自宅にはスチールの本棚が二つあるっきりで、仕事の本（建築関係）も置いていましたから、量も質もまったく大したことのないものでした」

それがトランクルームを借りる（しかも、聞くと二台目を借りたという）、毎日のように古本屋へ通うハメになってしまったのか。原因は私（岡崎武志）にある、と聞いて驚いた。

「岡崎さんが『読書の腕前』を出されたとき、私が住んでいる西荻窪で、トークショーをされましたよね。あのとき、古本の話聞いて、急に世界が開けたような気がしたんです。まったくそれまで知らない世界で。ブックオフ以外、普通の古本屋へはまったく行ったことがなかったですから、あれで、古本を買うようになったんですよ」

それは、まったく与り知らないことで、一般市民を、古本まみれにしてしまって、申しわけないことである。私が、学習院生涯学習センターで「古本講座」を受け持ったときも参加され、すっかりその道に足を取られてしまった。

モンガさんは、毎年、千駄木を中心とした、いわゆる「谷根千」エリアで開催される「一箱古本市」の話を、私から聞いておもしろそうだと思い、「助っ人」と呼ばれる運営委員を買って出たのだという。

その後、売る側に回り、千駄木にとどまらず、雑司ヶ谷の「みちくさ市」や、名古屋で一箱古本市などにも参加されるようになった。そのためにも本は必要だから、いわば読むための本というより、売るための本の購入が増えていく。こうなると、購買力に拍車がかかり、とめどもなく本が増殖していくのだ。

## ●「読む」から「買う」への転身

「ブログを始めた二〇〇五年頃、最初は買った本はみんな読んでいましたし、読書感想文みたいなものを、そこで書いていた。だから買うのも新刊に近い本が多かったですね。通勤定期券を持っていましたから、飯田橋、代々木、新宿、荻窪など、途中下車をしてはブックオフを回っていたんです」

コアな古本の世界を知る前、サラリーマン時代はじつによく本を読んでいたという。レコードは年間三百三十冊だそう。通勤の電車内で、往きと帰りで百ページ、残りを喫茶店に入って読み上げる。この頃は買った本は読むタイプ。

ところが、古本屋へ出入りするようになって、「一箱古本市」など売る側にも回って、読まないのに買うことが多くなった。「買うのに忙しくなって、最近では年にせいぜい三十数冊ですよ、読むのは」と笑う。

買うにあたって、参考にしたのが、現在、京都市で古本屋「古書 善行堂」を経営する山本善行のブログ。彼は古本屋を始める前から、『古本泣き笑い日記』（青弓社）、『関西赤貧古本道』（新潮新書）などの著書を持つ、名うての「古本者」だったが、古本買いの日々をブログで公表していた。

「あのブログが良かったのは、買った古本を、どこで、なにを、いくらで買ったかをちゃんと書いていたことです。それが勉強になりました。とにかく、古本といっても何を買っていいか、まったくわからない状態でしたから。山本さんのブログから、買った本のところだけ抜き出して、自分でまとめて一覧表にしたのをプリントアウトして、通勤の電車のなかでずっと読んでいました。それを覚えておいて、古本屋で見つけると、買う。これがうれしいんです」

モンガさんの偉いところは、知らない人名が出てくると、その生年や業績、著作など調べて、それも表にして勉強した、ということだ。「柳宗悦も知らなかったんですから」と謙遜するが、なかなかできることではない。

砂浜を掘れば出て来る「潮干狩り」みたいなもので、全く知らなかった古本世界へ、新しく仕入れた知識をぶつけて、どんどん本を買っていった。当然ながら、本は増えていく。とめどもなく増えていく。

## ●たちまちトランクルームが満杯に

ただし、トランクルームを借りるようになったのは、本のせいではない。千葉に転勤になって、会社の寮での一人住まいが始まった。五年前に、東京本社へ戻り、家から通うようになった時、千葉の寮で独り住まいしていた家具などの処分に困った。机やテーブル、テレビなど、買ったばかりのものもあったから、捨てるに忍びない。そこで、最寄りのトランクルームを借りることになった。

「四畳の広さで、月の賃料が八千円。これは、あとで知りましたが、非常に安いんです。都心でこの広さだと四、五万円取られます。ここに家具などを放り込んで、その空いたスペースに、買った本を置くようになったんです」

すごいのは、同じタイトルの本が何冊もあることで、村上春樹の『ねじ巻鳥クロニクル』全三巻が、十セットはあるという。村上春樹の本自体、百冊を超える量を持っている。理由を聞いたが「よくわからない」と言う。困ったものだ。

妻、娘と三人暮らしのマンションでは、六畳の自分の部屋以外には本を置くなと家族から厳命されている。急に、異常な量の本を買い込むようになったモンガさんを、ご家族はどう思っているか気になるころだ。「あきれってますね」と一言、答えが返ってきた。

そのうち溜まった本は、運送屋に頼んで、千葉のトランクルームへ送り込むようになった。目安としては、だいたい段ボール五十箱。それを半年ごとに送っているという。そのうち、最初に借りた部屋がいっぱいになり、空きを待ってもう一つ借りた。二階の方が少し賃料が安い。それで空きを待つことになった。

「四畳は意外に広くて、二人で来た運送屋の助手らしきおじさんが、部屋を見て、『へえ、これなら住めるなあ』と言いました（笑）。いや、窓もないし、住むのはちょっと、と思いましたが、天井も高いし、まあそれぐらいスペースがあるわけです」

それでも一つは満杯になってしまった。ある時期まで、送った本（というより買った本）をすべてパソコンで管理していたというが、単行本が一万五千冊、文庫本が五千冊までは把握しているという。その後も増え続けているから、少なくとも、古本病にかかったこの五年ほどの間に、二万冊以上の本を買ったことになる。一生かけて、二万冊の蔵書を持つ人でさえ、それほど多くはないだろう。

「蔵書の苦しみ」など無縁だった人が、それまで考えもしなかった「蔵書の苦しみ」を知るようになる。

### ●蔵書の苦しみから逃れるには

モンガさんの自室の写真を一部見せてもらったが、壁ぎわに、何本も塔のように本が積み重ねられている。いま、自分の部屋に本棚は一つで、あとはどんどん床に積んでいく方式。いまにも崩れそうだが、実際、今年三月の東日本大震災のときは、本の塔がみごとに崩壊したという。

写真には本しか映っていないが、あとはベッドと机とテレビがあるだけで、ほんとうに「本」しかない部屋だそう。二つ目のトランクルームには、まだ空きがあるというが、それでも時間の問題だろう。しかも、トランクルームには、本を詰め込んだ段ボールを床からびっしり積みあげているだけで、どこにどんな本が入っているかを把握していない。死蔵に近い状態なのだ。

都心に比べたら、賃料が安いといっても、運送代を含めたら、年に二十万円近いお金が、

ただ本の保管のために消えていく。古本屋へ売るとしても、買った値段に届くかどうかとも怪しい。いや、モンガさんの買っている本のほとんどが、現代文学と呼ばれる分野で、一部の人気作家（古本における）を除けば、いま一番売れない分野の一つだ。有利な処分は難しいだろう。

「だから、古本屋をやろうと思っています。儲けようとは思っていない。家賃が出れば、というぐらいの感じで。本職の古本屋さんが聞いたら、怒られるかもしれませんが、これまで溜めてきた本をなんとか売って行きたい」:

これは古本を熱心に買いあさり出してから、早くに考えたことで、じっさい、奥さんにもその決意を打明けたという。

「妻には最初、反対されました。商売の経験がない。古本の知識もそれほどない。修業もしていない。借金を背負ってまでするほどじゃない。そう言いました。それはその通りです。でも、私が真剣にやろうと考えていることや、時間をかけて話しているうちに、借金さえしなければ、という条件で賛成してくれました」

じつは、物件探しはもう始めている。自分が住む中央線沿線がベストだが、家賃が高い。自宅から余り離れると、交通費がかかる。田端でいい物件を見つけたが、それは先を越されてしまった。我慢強く、条件のいい店舗を探そうと、いま奮闘中だ。

「会社を退職するとき、三十人ぐらいの同僚に、『ブックオフは別にして、古本屋へこれまで行ったことがあるか』と質問して回ったら、九割九分の人間が、行ったことがないと言うんです。私もそうだったから、偉そうなことは言えないけど、もったいないなあ、と思いました」

そのおもしろさを伝えるため、自分がこれまで溜めに溜めてきた蔵書の有効活用として、古本屋経営という新しい道を、モンガさんは、歩き始めようとしている。